

文化的適応と「acomodação」

立教新座中学校・高等学校チャプレン ベレク・スミス



キリスト教の宣教学では「文化的適応」(cultural adaptation) や「インカルチュレーション・文化的受肉」(inculturation) と言った言葉が頻繁に使われ、議論されます。世界のどこにでも広めて行かなくてはならないキリスト教であるからこそ、世界のどこに行ってもその現地の文化や言語に何等かすり合わせなければならぬものでもあります。

使徒パウロの教えがこの文化的適応の原点となっています。「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようにになりました。律法に支配されている人を得るためです。また、わたしは神の律法を持っていないわけではなく、キリストの律法に従っているのですが、律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようにになりました。律法を持たない人を得るためです。弱い人に対しては、弱い人のようにになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。」(コリントの信徒への手紙一9章19-23節、新共同訳)

16世紀に東アジアにきたイエズス会の宣教師たちは、この言葉を心に留めていたことがよく分かります。必然的な部分も大きかったとはいえ、フランシスコ・ザビエルにしても、中国の教会を開拓したマテオ・リッチにしても、イエズス会の宣教師たちは批判を受けながらも中国

や日本の文化や風習に大きく寄り添ったかたちをとりました。アレッサンドロ・ヴァリニャーノは『日本巡察記』で何度も「acomodação」という言葉を使っています。この言葉を「適応」と訳すことはできますが、語源的には「何かに合わせる」という意味であります。このように、外部から来たものが日本のものと合わさっているという意識はキリスト教が日本に伝えられた当初からあることは確かです。「文化的受肉」と訳されている「inculturation」は、もう一步踏み込んだものであります。日本の文化で生まれ育った日本人によるキリスト教の形態を指すものであり、長い年月と対話というプロセスを通して生まれて来るものとして理解されています。

しかし、鎖国を経て、明治時代の日本という国の作り変えを行った日本では、国造りのために西洋のものを幅広く取り入れることになりました。このことが、もしかしたら最終的には日本のキリスト教にとって大きな問題となってしまったと考えられます。明治時代に入って来たキリスト教、そして特に日露戦争後に普及したキリスト教というのは至って西洋的なものであり、キリスト教に導かれた人々は同時に西洋に目が向けられていたと言っても過言ではないように思います。今では、日本人の多くはキリスト教を西洋と結び付けていて、西洋の宗教として理解することが一般的かもしれません。

これには大きな問題があります。まず、イエス・キリストも聖パウロも西洋人ではなく、中近東のユダヤ人であり、キリスト教は中近東の宗教であることに間違いのないのです。どこかでキリスト教を西洋のものとして認識してしまうと、西洋の価値観や文化とキリスト教の価値観や文化との違いが見えてこないことがあります。西洋の文化がキリスト教から遠ざかってし

まうなか、この問題は拡大する一方です。人権、性に関すること、戦争と平和に関すること、人間論など、様々なところで考え方や信念における西洋文化とキリスト教との食い違いが目立ちます。戦後の日本でキリスト教の普及が民主主義国家の設立と被ってしまったのと同じように、今ではキリスト教とはかけ離れた様々な西洋文化や思想がキリスト教と混じっている現実があります。

もう一つの問題としては、キリスト教が西洋のものとして認識されることにより、日本への適用 (acomodação) がされないまま何世代も存続し続けることが生じているのです。もちろん、ある程度キリスト教が日本に適用された形を取っていることも事実です。起工式や火葬での祈り、通夜の祈りなど、日本の教会でしか見られないものはあります。しかし、16世紀に来日したイエズス会の宣教師たちは必要にせまられていたところもありますが、南蛮屏風で描かれているように、畳の上でミサを行っていました。建築や儀式においてだけではなく、巡察師であったヴァリニャーノは各セミナリオに茶の湯の場を設ける指針を決めたのです。神のおもてなしをするために仕える教会の司祭と執事たちは日本のおもてなしを学ぶ必要があることを理解していました。

礼拝は靴を履いてオルガン伴奏とともに西洋の歌に日本語の詩を乗せることだと考える人もそう少なくはないでしょう。建築も式服もお香もすべてが洋風となっている現状です。パウロの「ユダヤ人に対しては、ユダヤ人になりました。」という言葉からはあまりにも遠く感じます。異物として存続するキリスト教は遠藤周作がいうキリスト教にとっての「沼地」の問題を継続させるものではないのでしょうか。

立教学院では西洋のキリスト教を前面に出しているように受け止められます。建築に関しても、音楽や礼拝の形式、服装に関しても、基本的にはイギリスの教会に倣っています。西洋のキリスト教を否定しているわけではありませ

ん。日本で西洋のキリスト教をなくするのが目的でもありません。しかし、日本という場所に適したキリスト教が生じないのは大きな間違いではないのでしょうか。また、キリスト教の根本にある聖餐式の典礼がおもてなしの典礼であることへの意識も、思いのほか低いように感じます。日本におけるキリスト教の学校としての今後の大きな課題の一つは、どのようにキリスト教を適用し、「キリスト教の日本文化受肉」を進めることができるのか、ということでしょう。

熊本県には真命山諸宗教対話・靈性交流センターがあります。包括的に日本の宗教と対話を続け、まさに南蛮屏風で描かれているようなミサの風景がここで見られます。キリスト教は個人それぞれの人生を変えるものだけではなく、文化全体を作り上げていくものである、という理解が必要です。そのためには、礼拝を総合芸術として認識することも必要であり、人間の魂だけではなく、五感のすべてに訴えるものとして行わなくてはなりません。教会のミサでは人間を包括的にもてなすことが主旨となりますが、そのためには建築、服装、香、花など、様々な要素が必要になります。キリスト教の文化という一つのものではなく、場所と時代によっていろいろな形を取るようになります。しかし、何よりも、イエス・キリストが弟子たちの足を洗ったときのように、食事の場に人々を迎え入れることが神の愛と教会の根本にあることを覚えなくてはなりません。

今後、日本でキリスト教の教育を行うためにも、包括的な日本でのキリスト教の文化的受肉が必要ではないのでしょうか。もう一度16世紀の宣教師たちに倣い、そのようなヴィジョンを持たなければ、今後も西洋かぶれのキリスト教のまま根付かない状況が続くことになりかねないでしょう。聖書の教えに基づいて人をもてなす愛の文化を築きあげることが、我々キリスト教徒の使命の一つであります。そのあるべき形を試行錯誤と議論を積み重ねて作り上げていきたいと思います。